

Title	韓国国立中央図書館蔵『鷹鷲方 全』（古古7-30-44）全文翻刻
Author(s)	二本松, 泰子
Citation	日本語・日本文化. 2013, 39, p. 21-51
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50768
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

韓国国立中央図書館蔵『鷹鶴方全』（古古7-30-44）全文翻刻

二本松 泰子

一 はじめに

朝鮮で制作された鷹書である『鷹鶴方』は、高麗時代と李王朝時代にかけて複数の異本が制作され、日本にも多くの諸本が伝来したことが知られている。そのような『鷹鶴方』に関する先学の研究は、『放鷹』「朝鮮放鷹史」の第二編「朝鮮の文獻に現はれたる鷹の名稱」¹「附、引用文獻」・田川孝三氏『李朝貢納制の研究』第一章「附・安平大君李瑋著鷹鶴方について」²、村戸弥生氏「朝鮮時代放鷹史・鷹書研究アプローチのための予備ノート」³、拙稿「『鷹鶴方』享受の一斑―韓国国立中央図書館蔵『鷹鶴方全』（古古7-30-44）の奥書をめぐって」⁴などがある。

このうち田川氏論文によると、『鷹鶴方』の異本の種類は以下のように分類される。

- ① 李兆年編とされる『高麗古本鷹鶴方』（14世紀成立）。
- ② 李瑋編とされる『古本鷹鶴方』（15世紀成立）。
- ③ 李燭編とされる『新增鷹鶴方』（16世紀成立）。

『放鷹』と田川氏論文によると、右掲の①『高麗古本鷹鶴方』は林羅山と朝鮮通信使である金世濂との問答を記載

した『海槎録』や李圭景（李氏朝鮮第二四代国王憲宗時代、在位期間一八三四年～一八四九年）編『五洲衍文長箋散稿』に「星山李兆年」著の『鷹鶴方』のあることが指摘されている。しかし、現存する伝本には、書中には李王朝時代にまで下るとおぼしき謄文が見えることから、高麗時代の李兆年の著書そのものかどうかは疑わしいとする。田川氏はまた、右掲三種の『鷹鶴方』の本文を比較して③『新增鷹鶴方』は②の『古本鷹鶴方』を「増補」したものと判じている。

ところで、右掲①③の『鷹鶴方』のうち、日本に伝来したとされているのは②『古本鷹鶴方』と③『新增鷹鶴方』である。そのうち、より多くの伝本が流布したのは③『新增鷹鶴方』で、件の林羅山も訓点や送り仮名を付したテキストを所持していた（国立公文書館内閣文庫蔵『新增鷹鶴方』（函号三〇六―三〇七））。同書は膨大な数の伝本が全国的に展開し、国字解などの注釈テキストも多数制作された。一方の②『古本鷹鶴方』は、③『新增鷹鶴方』が原拠としたテキストとされるにも関わらず、現存が確認できるのは以下の三本の和書のみである。ちなみに、朝鮮書の『古本鷹鶴方』は管見において確認できなかった。

- ・ 韓国国立中央図書館蔵『鷹鶴方全』（古古 7-30-44）
- ・ 宮内庁書陵部蔵『古本鷹鶴方全』（函号 163-1085）
- ・ 国立公文書館内閣文庫蔵『古本鷹鶴方』（函号 306-312）

このうち先の田川孝三氏論文が紹介している『古本鷹鶴方』の伝本は、宮内庁書陵部と内閣文庫に所蔵されている二本のみで、韓国国立中央図書館蔵『鷹鶴方全』については全く触れていない。あるいはその存在を知らなかったのかもしれない。しかしながら、韓国国立中央図書館本の奥書には他の二本と比較して書写（転写）に関する情報がより詳しく記載されている。すでに稿者は、その記載情報を検討して『古本鷹鶴方』の享受の一斑を明らかにした。⁶

すなわち、同書は我が国において江戸時代前期（承応年間）～後期（天保年間）に「鷹匠」もしくはそれと所縁深い人物たちに限定して伝来されたものらしく、近世期の鷹匠たちが独自のコミュニティを有していたことを窺わせしめることを検証したのである。このように同伝本には、当時の鷹匠たちによる鷹書を介した放鷹文化の伝播の在り方を示唆する情報や、我が国における朝鮮放鷹文化受容の実態を明らかにする様々な手掛かりが記載されている。

そこで本稿では、現存する『古本鷹鶴方』の伝本の中から、韓国国立中央図書館蔵本の全文を掲出する。このような我が国に伝来した朝鮮の鷹書について、その奥書に見える識語を含む全容を紹介することによって、いずれ日韓放鷹文化史を明らかにする手だてとなることを期するものである。

二 『古本鷹鶴方』の諸本

前節で紹介した『古本鷹鶴方』の伝本は、写し間違いとおぼしい数か所の異同を除き、三本ともほぼ同文となっている。ただし、各丁における行数や行ごとの字配りについては宮内庁書陵部蔵本と国立公文書館内閣文庫蔵本は一致しているが、韓国国立中央図書館蔵本は異なった体裁となっている。

一方、頭注については、宮内庁書陵部蔵本と韓国国立中央図書館蔵本がきわめて近い文言を記載しているが、内閣文庫蔵本は異同を見せる。そもそも宮内庁書陵部蔵本と韓国国立中央図書館蔵本には合計20項目以上の頭注が記載されているのに対して、国立公文書館内閣文庫蔵本の頭注は2項目しか記載されていない。

各伝本の書誌については以下のとおり。

○韓国国立中央図書館蔵『鷹鶴方全』

所 蔵 韓国国立中央図書館 古古7-30-44。

卷数 一卷。

外題 表紙左肩に「鷹鶴方全」と記す貼題簽。

丁数 一七丁。

行数 半葉一〇行無罫。訓点付き漢文。

藏書印等 表紙見返部分に楕円形の受け入れ印「朝鮮総督府図書館、図書登録番号」（楕円の中に「昭和12. 4. 15」

「古 1 3 3 2 3」と記載）他2つの押印。一丁表に「雜司谷片山賢」他2つの藏書印。

奥書等

一六丁表に「右古本鷹鶴方雖多不審依无類本／不能校合只任本書訖 通堯」。一六丁裏に「彰考館御本

奥書／右一者以二山一木藤一右一衛一門所持本一令二書寫／校一合一畢 承應三^甲午年六月六日／古本鷹

鶴方以二水戸彰考館御本書寫／之一天保四年五月廿六日／史館待命 平小山田與清」。一七丁表に「右此

一帖者以一平與清小山田將曹自筆／本一於東武邸舍手自下^{ミツカラ}翰^{カシユ}書二寫之一畢／天一保四年歲次癸巳^{キシ}仲秋

下^{ミツカラ}翰日／正木治部越智宿禰通堯（花押）。一七丁裏に「右古本鷹鶴方者以正木通堯手書本膳／寫畢天保四

癸巳之秋九月廿八日起筆／十月五日終卷馴鷹繫務之間連夜務下／採毫成功畢通堯者近江彦根之家士也／善

國學側耽採鷹書頃日奉主命來江戶／館而勤仕余有邂逅者而交情密也固得／借此書寫焉／雜司谷鷹人 片山

勇八賢（花押）。

○宮内庁書陵部蔵『古本鷹鶴方全』

所蔵 宮内庁書陵部。函号一六三一〇八五。

卷数 一卷。

外題 表紙左肩に「古本鷹鶴方全」と記す貼題簽。

内題 表の遊紙左肩に「古本鷹鶴方 完」の墨書。

寸、法 縦23.5糎×横16.5糎

丁 数 二七丁。表裏に遊紙各一丁。

行 数 半葉七行無野。訓点付き漢文。

蔵書印等 一丁表に縦4糎×横4糎「宮内省圖書」の蔵書印。裏の遊紙に縦4.5糎×横2糎「昭和3年12月 伯爵松平直亮寄贈」の受け入れ印。

奥書等

二七丁表に「彰考館本奥書／右者以山本藤右衛門所持本／令書寫校合畢／承應三^甲年／六月六日／古本鷹鶴方以水戸影考館御本／書寫之天保四年五月廿六日／史館待命／平小山田與清」。

○国立公文書館内閣文庫蔵『古本鷹鶴方』

所 蔵 国立公文書館。函号三〇六一三一二。

卷 数 一卷。

外 題 表紙左肩にウチツケ書きで「古本鷹鶴方」。

内 題 表遊紙左肩に「古本鷹鶴方」の墨書。

寸 法 縦23糎×横16糎

丁 数 二七丁。表裏に遊紙各一丁。

行 数 半葉七行無野。訓点付き漢文。

蔵書印等 表紙右下に縦7糎×横2糎「新宮城書蔵」の蔵書印。一丁表に縦3.8糎×横3.8糎「日本政府圖書」、縦3.8糎×横3.8糎「圖書之文庫」、3.8糎×3.8糎「内閣文庫」、縦7糎×横2糎「新宮城書蔵」の蔵書印、「明治十六年購求」の受け入れ印。二六丁裏に縦3.8糎×横3.8糎「圖書之文庫」の蔵書印。

二七丁表に「彰考館御本奥書／右者以山本藤右衛門所持本／令書寫校合畢／承應三^甲年／六月六日／古

奥書等

本鷹鶴方以水戸影考館御本／書寫之天保四年五月廿六日／史館待命／平小山田與清」。

注

- (1) 『放鷹』（宮内省式部職編、一九三一年二月、吉川弘文館、二〇一〇年六月新装復刻）。
- (2) 田川孝三氏『李朝貢納制の研究』（東洋文庫刊、一九六四年、初出「李朝の鷹房と鷹子進上」『朝鮮学報』一四、一九五九年一〇月）。
- (3) 鷹書研究会第一一回例会口頭発表、二〇一〇年七月一〇日。
- (4) 二本松泰子『鷹鶴方』享受の一斑―韓国国立中央図書館蔵『鷹鶴方全』（古古7-30-44）の奥書をめぐって―」（鷹書類の調査と研究）所収、平成20年〜平成23年度、科学研究費補助金（基盤研究C）研究課題番号20520189）
- (5) 注（4）に同じ。
- (6) 注（4）に同じ。

【凡例】

- 一 翻刻は韓国国立中央図書館蔵『鷹鶴方全』（古古7-30-44）によった。
- 一 翻刻に関しては、できるかぎり原文に忠実になるようにつとめ、改行は原本に従った。
- 一 改丁は」をもって示し、（一オ）のように丁数ならびに表裏を示した。
- 一 字体は出来るだけ底本の表記を重んじるように心がけたが、異体字など、一部通行の字体に改めたところもある。
- 一 花押は（花押）とし、その形態は示さなかった。
- 一 頭注については、本文の該当部分に算数字を付し、それに対応する注の文言を一括して本稿の末尾に記載した。

【本文】

鷹鶴方序

張一九一齡云鷹也者名揚二於尚父一義見二於詩一

鶴也者跡隱二於古人一史闕二其載一豈昔之多

識物亦有二遺一以此觀レ之鶴之名始見レ唐矣

夫鳥之鷲者其類有二曰鷹曰鶴其黃一鷹

白一鷹角一鷹鶴一子青一鶴乃鷹之類也其鴉一鶴

兔一鶻燕一鶻海一青籠一奪黃一鶻乃鶻之數也凡

此鷹一鶻非二特玩レ形所以資二之鳥數一也攀レ雲

以二擊鳥之力一以為レ娛故自レ古及レ今王一公大

人莫レ不レ愛レ之必窮一崖谿一壑之險費二羅網一之

巧一然一後可レ得及二其調養一法亦有レ具畫不レ離

レ手夜當二保一護一其勤如レ此猶且失二其節一常而

疾病易レ生或至レ掃レ群所謂鷹者尤一甚焉古

今之人曾無二攻一治之術一其得レ之也難其養

レ之也勤而及二其生一病也拱レ手待レ斃而不能

レ 救也余竊恨之觀^レ其飲^一啄之勢一察^レ其肥瘦^一
之候^一以^レ尋^レ生^レ病之根^一爰^レ將^レ本草^一因^レ其藥性^一

隨^レ證治^レ之無^レ不^レ立^レ效^一遂^レ著^レ爲^レ方大^一抵調^レ養^一

鷹^一鶴^一之術皆出^レ於^レ戲^一玩^一雖^レ君子之不屑^一然

或^レ留意^レ於^レ鷹^一鶴^一者觀^レ此有^レ以^レ得^レ其^レ備^レ急云^一一ウ

正統甲子獵月暇日書^レ于^レ匪懈堂之梅竹

軒^一

教^二鷹鶴^一一名

○黃^一鷹^一教^二之^一名^一白鷹投伊毘^一教^二之^一雉鳴^一甫加乙者^一白木鷹^一教^二之^一雉鳥

鴨^一○角^一鷹召鶴教^二之^一雉兔^一○鶴子結外^一教^二之^一鶉鶉^一○青鶉非耶

下^一教^二之^一鶉雀^一○鴉鶉雜親^一教^二之^一鷓鴣鶉^一○免^一鶉蓋加耳^一教^二之^一雉兔^一

○免^一燕々^一鶉者于非耶下^一無^レ教^レ而有^レ名^一○籠^一奪都弄太^一教^二之^一鶉與^一

鶉鶉^一○黃鶉具只乃^一亦無^レ教^レ而有^レ名^一○海青松鶉^一無^レ所^レ不^レ教^レ而^レ至^レ下^レ於

有^レ中折^レ鶉雛^一者^一

昔楚文^一王好^レ獵^一有^レ下^レ人猷^一鳥^一者^一是謂^レ海青^一二^一二^一オ

爲^ス二獵^ヲ於^テ夢澤^ニ一毛群羽族^ノ爭^{ヒテ}噬^ヒ搏^ツ此^ノ鳥^ニ瞪^ニ

目^ヲ雲^ニ際^ニ無^シ二搏噬^ノ之志^シ一王^ヲ謂^テ一者^ニ曰^ク汝^ヲ將^レ欺^ス

余^ヲ耶答^ハ曰^ク若^{クモ}效^ス於^テ雉^ニ一兔^ニ一臣^ニ豈^ニ敢^テ獻^ス俄^ニ而^テ雲^ニ

際^ニ有^リレ物^ヲ鮮^{カニ}白^シ不^レ辨^ス二其^ノ形^ノ一此^ノ鳥^ハ便^カ聳^シ翅^ニ而^テ昇^ル

失^ス二其^ノ所^ヲ處^ヲ一須^ク曳^キ毛^ヲ墮^シ若^{クモ}雪^ノ血^ノ一下^ル如^{クモ}雨^ニ有^テ二大

鳥^ハ墜^ル地^ニ度^ス二其^ノ兩^ノ翅^ヲ一其^ノ大^ニ數^ニ一里^ノ衆^ニ莫^{クモ}能^ク識^ス一有^テ

博物^ノ君子^ハ曰^ク此^ノ大^ニ鵬^ニ雛^ニ也^ト由^テレ此^ノ觀^レ之^ハ無^レ所^ナ

不^レ教^ス亦^ハ有^リレ拋^キ也^ト籠^ニ一奪^テ教^ス三之^ハ鶉^ニ與^テ二鶉^ニ鶉^ニ一黃^ニ鶉^ニ

亦^ハ無^レ教^ス而^テ有^リレ名^ヲ凡^ク鷹^ノ鶉^ノ所^レ教^ス大^ニ率^ニ若^{クモ}此^ノ耳^ト

不^レ須^ク二以^テ名^ヲ定^ム一也^ト且^{クモ}教^ス之^ハ術^ヲ備^フ二於^テ時^ノ人^ノ所^レ爲^ス一^ニ二ウ

傳^フ習^フ已^ニ久^ク不^レ必^ス更^ニ立^テ他^ノ法^ト一

用^ル藥^ヲ法^ヲ

夫^ハ鷹^ノ鶉^ノ本^ニ有^リ二凌^グ霄^ノ之^ハ氣^ニ一而^テ見^ル二於^テ人^ノ一飢^ル則^チ

隨^フ人^ノ飽^ム則^チ揚^テ去^ル故^ニ其^ノ生^ルレ病^ヲ也^ト率^シ皆^ク傷^レ心^ヲ迫^ル

情^ヲ怯^ム勞^ム内^ニ熱^シ調^フ保^フ有^レ違^フ失^フ二其^ノ本^ノ性^ノ一耳^ヲ作^ルレ食^ヲ

當^レ一細^ク切^リ一而^テ不^レ能^ク可^ク也^ト鷹^ノ鶉^ノ有^リ二強^ク子^ト一用^テ二草^ヲ紐^フ

湯(2)一令浴焉又以(3)二梨蓂根 栝部根 二味爲末

加(4)二輕粉黃連一細研肉一裹飼之絶一妙亦用二水

銀一散一 ○鷹鶴尿有 二長一虫一以二狼牙草一煎 水

灌一(5)下或細一末 和食 ○鷹一鶴有 二傷一毀處用二三才

輕粉松脂一塗之待成 痲去 痲復用二童便小兒

尿也塗之令不(6)成 痲如或足一 脚浮腫用二火一鐵

針之且納二艾氣一 ○鷹鶴若有 内冷外熱

所 尿成 塊 白礬二青綠一者用二甘草湯一和食雖

無二甘草湯一用二温水一無レ妨 ○鷹鶴如有レ失

其節一常飲食不レ調或吐レ食或遲 下或所レ尿

溷濁或身端激熱促息漲氣困倦多睡目

睛不レ厲 羽毛不レ快 凡百病證皆以二龍腦圓

黃連散煮肝圓 治 之 龍腦圓 爲妙 ○鷹

鶴若有促息漲氣鼻塞 而目有レ淚者 以二朱一三ウ

砂散一吹一納鼻一 中一亦用二龍腦圓一此葉尤宜 二於

鶴 若無 二朱砂散一以二皂角湯一代之 ○鷹鶴

如或為物所觸目睛迷眩而勢急者用當

歸散若不當歸散一人尿管口為妙○鷹

鵝凡有不安之證當忌鴨與白雞黃狗肉

凡用藥多少宜隨鷹之大小

劑藥法

●龍腦圓龍腦半錢研大黃五錢人參三錢右三味內除龍腦外合

為細末入龍腦令均滴水作丸如赤小豆大以金箔為衣每服二丸

●朱砂散朱砂雄黃各一錢研麝香半錢研三稜二錢雞爪者山茨菰千金四才

子大戟各一錢半右七味內除朱砂雄黃麝香別研外合為細末入研藥

令均以葶管子盛藥小許吹入鼻中

●巨角散巨角半錢水半鐘煎待冷入鼻令搖之

●煮肝圓胡黃連去鬚大黃蒲栝去鹿皮人參去芦苦參右七

味各量三四錢除蒲黃外合為細末入蒲黃令均納猪肝內以竹葉裹用

童便煮熟去肝取藥為丸如赤小豆大一每服三丸漸加至五丸

●當歸散當歸一錢大黃二錢右二味咬咀用童便煎去滓待冷灌下

●黃連散黃連大黃蒲黃黃栝人參右五味各量二錢一咬咀都作一

服ニ用ニ并ニ花ニ水ニ小鐘ニ煎ニ至ニ半鐘ニ去レ滓待レ冷灌下

●水銀散 水ニ銀半ニ錢輕ニ粉麝ニ香各一錢 右合研不レ見ニ水ニ銀ニ星ニ為レ度搽ニ有ニ四ウ
レ蝨處ニ一

歲在ニ壬戌ニ冬有ニ鴉ニ鶻善ニ才者ニ一ニ日 鼻息塞

急目有ニ露ニ涙時人ニ皆以爲ニ項ニ溺ニ欲灸ニ之ニレ余

以ニ爲鷹ニ鶻不レ可下以ニ人病ニ治ニ之試以ニ朱ニ砂ニ散ニ

吹レ之且用ニ煮肝ニ圓ニ果 有ニ神效ニ至レ今存焉厥

後余得ニ白ニ黃ニ鷹ニ甚愛レ之是ニ時鷹ニ病方興ニ一

洞之内如レ掃無レ遺 一ニ日此鷹果 有ニ退ニ食激ニ

熱之證ニ人皆曰當避方置之余於レ是用ニ龍ニ

腦ニ丸ニ獨此ニ鷹存焉又今年秋之在ニ榭水ニ一也

鷹事方盛 競ニ誇其能ニ將ニ還 鷹ニ病亦興 生ニ者ニ五才

十常ニ一ニ余ニ之所レ養有レ七病ニ勢已ニ兆時ニ無ニ

他妙ニ藥ニ止以ニ黃ニ連ニ散ニ理レ之及ニ其還ニ一也六ニ鷹

無レニ恙而唯一ニ鷹凍ニ死ニ耳余ニ之所レ驗頗ニ多 姑

學ニ數ニ條ニ明ニ其用ニ藥之妙ニ觀レ此者足ニ以取レ證

焉^{コレハコレ}之^ノ養鷹^ノ之^ノ方^ハ矣^ニ ○時人教鷹

吐鷹調習法

吐^ト鷹^ト初^ハ 捉^ム 則^ム惡^ム 人^ヲ怯^ラ内^ノ一^ハ熱^ハ煩^ム渴^ム 須^ク 三^ニ即^チ 勸^ム

水^ニ坐^ス于^テ無^ク人^ト暗^ク 味^ヲ涼^ク所^ニ 一^ニ飼^フ 食^ム時^ト人^ト潜^ル 入^ル不^ス

令^テ鷹^ト驚^ラ一^ニ動^ク 一^ニ勸^ム 食^ム 則^チ鷹^ト甘^ク 食^ム矣^ニ

新^ニ鷹^ト畏^レ 人^レ 數^ハ飛^ハ 勿^ク 二^ニ急^ク 一^ニ速^ク 拳^ヲ持^テ 一^ニ須^ク 下^テ待^テ 三^ニ一^ニ三^ニ一^ニ日^ニ 二^ニ五^ニウ

後^ニ夜^ト則^チ拳^ヲ 之^ト然^ル 不^ス 二^ニ徹^ク夜^ト拳^ヲ持^テ 一^ニ日^ト久^ク 漸^ク々^ク 晝^ル

夜^ニ不^レ離^ル 手^ヲ坐^シ 架^ニ則^チ必^ズ 二^ニ人^ト 一^ニ衆^ク多^ク 處^ニ

吐^ク鷹^ト捉^ム 則^チ本^ト肥^ル 不^レ下^ル 而^{シテ} 調^シ習^ス 不^ス 厭^ム 人^ト 則^チ初^メ

引^レ食^ム自^ラ 近^ク 而^{シテ}呼^ブ 日^ト漸^ク遠^ク引^ク 不^ス 然^ル 而^{シテ}初^メ 據^テ 二^ニ遠^ク

引^ク 一^ニ則^チ雖^シ 来^ル 不^レ直^ク 而^{シテ}到^ル 二^ニ其^ノ習^ヲ 一^ニ常^ク 不^レ可^ク 棄^ス矣^ニ

凡^ソ新^ニ鷹^ト畏^レ 人^ト 怯^ラ 勞^ム 服^ム 食^ム 後^ニ不^レ可^ク 二^ニ拳^ヲ持^テ 一^ニ也^ト 須^ク 二^ニ

下^ル 食^ム 後^ニ拳^ヲ 之^ト 觀^テ 鷹^ト 之^ノ柔^ク 順^ク 從^テ 人^ト 引^ク 食^ム 服^ム 布^ヲ 塊^ト 耶^ト塊^ト 耶^ト則^チ

内^ニ一^ニ陋^ク有^テ 油^ヲ 疑^フ 結^ス 布^ヲ 二^ニ羽^ト 中^ニ作^ル 食^ム 一^ニ内^ノ疔^ヲ 裹^ヒ 而^{シテ}飼^フ

之^ト則^チ翌^ニ晝^ニ還^ル吐^ク 之^ト則^チ去^ル 籠^ニ 内^ニ清^ク 布^ヲ 則^チ爲^ル 妙^ク 一^ニ六^ニ才^ト

越^チ三六七日^ヲ一^ニ三度及^シ二^ニ水食^ヲ肥得^ル一^ニ中須^ク二三

日^ニ登^リ山^ヲ拳持^ス一^ニ而引頸省^ル聲見^ル二^ニ飛雉則垂手^ス

下^チ及^シ放^ツ

新鷹放教^ノ法

拳^{スル}二^ニ新^ニ鷹^ヲ一^ニ者日將^ニ暮^シ矣見^テ二^ニ當^レ入^ル近^ク飛^バ一^ニ好^ク手^ヲ放^ツ

レ^レ之^ノ得^ルレ^レ捉^ル則勿^ク二^ニ急^ク速直^ク進^ム一^ニ此恐^ル鷹^ノ之^ノ驚惶^ヲ棄^テ

去^シ也作^シ聲呼^ブレ^レ之^ノ須^ク下^テ待^テ二^ニ甘^ク食^ム一^ニ而^{シテ}後^ニ遮^リ面回^リ歩^ク

漸進^ク到^リ鷹^ノ處^ニ一^ニ先執^リ二^ニ結^シ足^ヲ皮^ヲ貫^ク長^ク皮^上此慮^ニ鷹^ノ

之^ノ颺^リ去^ル一^ニ也雉^ノ腰折^リ殺^ス除^テ二^ニ熱^ク血^ヲ第^ニ肉^ヲ及^シ内^ノ肉^ヲ一^ニ

并銀^ヲ半^ク食^ム一^ニ餘許^ク而^{シテ}後浮取^リ其^ノ浮^ク取^ル之^ノ法^ヲ人^ノ六^ツ

之手^ヲ執^リ拈^リ納^ス鷹^ノ之^ノ兩^ノ脚^ノ一^ニ間^ニ二^ニ三指并執^ル一^ニ兩^ノ

脚^ノ一^ニ則自^ラ然^ル而解^ケ也或^シ曰^ク鷹^ノ熱^ク物雖^レ調^フ二^ニ鷹^ノ勞^シ

際^ニ一^ニ不^レ可^ク服^ム二^ニ温食^ヲ一^ニ况^シ新^ニ鷹^ノ畏^ルレ^レ人^ノ内^ノ怯^ク之^ノ氣未^ダ

疹^ト其^ノ心煩^ク熱^ク其^ノ可^ク服^ム二^ニ熱^ク食^ヲ熱^ク血^ヲ一^ニ乎必^ク少^ク啗^ス二^ニ

都^ノ邑支端^ノ肉^ヲ一^ニ而浮取^リ俄^ニ而氣歇^ク其^ノ雉^ノ温^ク肉^ヲ

更^ニ飼^フ二^ニ半^ク食^ム一^ニ餘許^ク一^ニ可^ク也

凡鷹不_レ可_二多放_一疲勞_ス新_一鷹尤_レ可_レ慎_也初_一放_ハ

之日與_二二_一三_一日_一不_レ過_二二_一手_一五_一六_一日_一二_一手_一至_二

一朔_一母_レ過_二三_一手_一小_一放_レ為_レ妙_熱則_レ不_レ拘_二手_一數_一

粗_知鷹_一理_一者_一此_一際_須每_一日_一捉_レ食_レ為_レ妙_若問_一七_才

斷_放捉_レ生_レ病_矣又_一云_一暮_手須_二捉_一而_一甘_食一_則

其_鷹暮_一必_力捉_レ此_一言_似乎_巧然_一雖_二老_鷹一_終

日_放一_則勞_レ身_内渴_一熱_一氣_常多_當此_一之_時一_恣

服_二熱_一食_熱血_一則_一因_二温_合集_一必_一遲_一下_一生_レ病_矣

慎_レ之_一慎_レ之_一

凡_鷹放_使之日_鷹性_本柔_一而_一瘦_一則_一飼_二半_一食_一

可_也本_一性_惡而_一肌_肥則_一飼_二三_一點_一可_也

凡_性惡_一鷹_登山_欲放_レ之_時專_不向_レ心_人尿_一

和_レ食_二三_一點_可也_又捉_二雉_于空_中墮_レ地_内

傷_亦用_為妙_鶻同_一七_ウ

凡_鷹春_一秋_一下_一肥_無害_冬一_月極_一寒_不可_二上_一肥_一

雖_然過_一肥_則不_可性_一惡_一鷹_大肥_一則_有二_一鷹_一去_一

之志ハカツテ量ク宣レ飼フ之ヲ

凡鷹多放サハ則知サ主ノ之不ア飽マ飼ハ或ハ貪ム捉リ或ハ選ハ

雌メ一ツ雉ノ此レ則知ル二ユウ雄ノ雉ノ之チ力キ強ク也故ニ以テ二ユウ雄ノ雉ノ一ツ爲ス

食ト呼ト引キ飼フ而シ教フ之ヲ

上チ木ニ不レ下ラ鷹ヲ呼ヒ引キ來ル則須ク下シ甘セ食シ而シ後浮シ

取ル上ニ不レ然ラ而シ即チ時ニ浮取ル則其ハ習ハ不レ可ク棄ス矣ハ

凡鷹不レ使ハ而シ坐ス養肥カヒ安ス則懷イダク二レ凌シ雲ノ之志ノ一ツ矣ハ

雖トモ二ニ三ニ日ト一ト坐シ養鷹ハ須ク二ニ朝ノ昏拳レ之使シ二ニ其柔順ノ一ツ八才ハ

後放ニ之ヲ爲シ妙ハ○初ニ放ニ于多キ樹處ニ一ツ

凡鷹小ソ食無シ害因ケ二ニ多ク食ニ而シ生ス病但瘦シ鷹小ソ

食ス則加フ瘦ヲ矣且勿ツ食フ脚力ハ一ツ食フ二ニ脚力ハ一ツ則成ス二ニ霜ノ一ツ

角及吾ハ叱邪シ臥ス矣鷹多ク放内ハ熱日ニ常食レ半ツ

下チ後夜ニ必勸ス水ヲ

二ニ月ト以後十一月以前陽ハ氣盛ク長不レ可ク二ニ當テ午ニ

放使チ冬則可シ服温ニ食フ春ハ秋則不レ可ク服温ニ食フ一ツ

常使ニ水ト食セ爲シ妙雖トモ二ニ雪ト上ト無ク風日ハ煖ハ則終日ト

放^チ使^{ラセ} 爲^シ 爲^シ 妙^{コシト}

不^レ幸^{ニシメ} 兩^ハ鷹^ハ相^ハ捉^{トツ}母^レ下^ニ以^テ他^ハ術^ツ救^フ之^ト兩^ハ鷹^ハ之^ノ項^{イダ}八^ハウ

一^ニ時^ヲ堅^ク執^ス 則^シ自^ラ然^ル 而^{シテ}解^ス

冬^ハ月^ニ因^リ兩^ハ雪^ニ或^ハ因^リ執^ス雉^ヲ于^テ雪^ニ水^ハ鷹^ハ羽^ヲ濕^セ 而^{シテ}

凍^{コホラ}坐^ハ照^テ陽^ス地^ニ且^ニ無^ク烟^ヲ細^ク火^ヲ盛^テ器^ヲ置^ク於^テ外^ニ

地^ニ以^テ鷹^ハ遠^ク拳^ヲ而^{シテ}照^ス之^ヲ以^テ手^ヲ照^ス火^ヲ捫^ル鷹^ハ則^シ

其^ノ羽^ハ可^ク速^ク 一^ニ乾^ク 一^ニ也^{ナリ}

肥^ク鷹^ハ性^ハ惡^ク内^ニ陋^ク每^ニ飼^フ水^ニ食^シ連^テ服^ス布^ヲ塊^ヲ耶^ハ而^{シテ}

朝^ハ昏^ク拳^ヲ持^ス 則^シ肌^ハ浮^ク柔^ク性^ハ順^ク矣^{ナリ}

鷹^ハ儉^ク食^シ則^シ上^ニ肌^ハ内^ニ陋^ク盡^ク下^ニ其^ノ食^ヲ而^{シテ}後^ニ水^ニ食^ス

二^ニ三^ニ點^ヲ及^テ塊^ヲ耶^ハ多^ク少^ク量^ヲ宜^ク服^ス之^ヲ朝^ハ昏^ク拳^ヲ持^ス

適^ク飢^ク而^{シテ}後^ニ放^ス之^ヲ九^ノ才^{ナリ}

瘦^ク鷹^ハ上^ニ肌^ハ法^{ナリ}

瘦^ク鷹^ハ以^テ乳^ヲ汁^ヲ和^シ食^ス飼^フ之^ヲ又^{シテ}温^ク食^ス數^ク々^ク飼^フ之^ヲ

半^ク食^ス可^ク也^{ナリ}下^ニ糧^ヲ雖^シ盈^ク上^ニ糧^ヲ空^ク 則^シ又^{シテ}飼^フ之^ヲ矣^{ナリ}

自^ラ捉^ル雉^ヲ與^テ射^ス雉^ヲ中^ニ 二^ニ新^ク雉^ヲ 則^シ皆^ク温^ク食^ス

凡鷹之内一陋皆以三羽一塊一耶治之又以二人尿一和レ食飼之

作レ食法 朝則半一食夕則大鷹大一雉脚

小一鷹小一雉脚是適中也半食

謂二雉半

脚量一也

作レ食人須二先洗レ手執作一當二細一長一而勿ニ麤大

若有二乾處ニ必去レ之又去下皮一脛間如二鼻一汁一不レ九ウ

淨之物一又去二皮與油而後又用二雉羽一磨ニ肉

上醜一物一去二脚一力一以レ刀亂裂沉ニ冷水一淨洗飼

レ之食之多一少量ニ鷹之大一小一適一中飼レ之

坐レ鷹處法

常坐一寒一温適一中無二烟一氣淨廳一爲レ可冬一月極

寒則常坐二温一處一不レ妨又冬一日坐二陽一處一然肥一

鷹則雖二冬月一不レ許二當陽坐一之春一秋一坐二陰一地一

鷹甚惡二烟一氣一糠一烟尤一毒養鷹之家々一内及

近^ニ地^ノ勿^レ燒^ク 二^ニ糠^ノ火^ヲ 此^ノ鷹^ノ病^ノ之^ノ所^ニ由^テ生^ス 一^也

想⁽¹⁵⁾鷹⁽¹⁵⁾安⁽¹⁵⁾否⁽¹⁵⁾法⁽¹⁵⁾ 一〇オ

凡^ニ鷹^ノ坐^レ架^ニ強^ク拂^フ 羽^ヲ收^メ 二^ニ一^ノ足^ヲ 一^宿 則^レ回^ル 頭^ヲ而^テ挿^ス 二

左^ニ一^ノ右^ニ伸^ヘ 氣^ヲ屎^ニ 則^レ一^ノ日^ニ 二^ニ一^ノ三^ノ度^ヲ所^ニ屎^ノ大^ク如^ク 掌^ノ

黒^ク一^ノ白^ク相^シ 離^レ肩^ヲ背^ヲ 羽^ヲ不^レ動^ス 食^ヲ俗^ニ 上^ニ則^レ柔^ク一^ノ軟^ク下^ニ

則^レ堅^ク一^ノ硬^ク肛^ヲ一^ノ門^ヲ窄^ク小^シ 而^テ冷^ク常^ニ食^ヲ速^ニ 下^ニ此^ノ 是^レ平^ニ

安^ノ之^ノ候^也

聞⁽¹⁶⁾見⁽¹⁶⁾經驗⁽¹⁶⁾方⁽¹⁶⁾

鷹^ノ有^リ 二^ニ足^ヲ 傷^ヒ 破^レ浮^キ一^ノ腫^ム 須^ス 安^ニ 坐^シ 暗^ク 寂^ク 處^ニ 一^ノ或^ハ 以^テ 醋^ヲ

和^シ 墨^ヲ 塗^ル 傷^ニ 處^ニ 一^ノ又^ハ 以^テ 善^ク 養^フ 一^ノ令^ム 不^レ驚^ク 一^ノ動^ス 一^ノ則^レ計^ル 日^ヲ

而^テ差^ス 鷹^ノ之^ノ頂^ヲ 勒^ス 有^リ 二^ニ三^ノ一^ノ四^ノ一^ノ種^ニ 一^ノ或^ハ 促^ス 一^ノ息^ヲ 或^ハ

有^リ 一^ノ涙^ヲ 或^ハ 如^ク 人^ノ之^ノ疥^ヲ 瘡^ニ 而^テ毀^レ 或^ハ 兩^ノ肩^ヲ 垂^リ 下^ニ 或^ハ 一^ノ〇ウ

兩^ノ一^ノ足^ヲ 浮^キ 腫^ム 皆^ク 頂^ヲ 勒^ス 證^ス 也^ヲ 皆^ク 以^テ 二^ニ川^ノ 中^ニ 小^ノ螺^ヲ 一^ノ去^ル

レ^レ皮^ヲ 肉^ヲ 一^ノ片^ヲ 裹^ヒ 飼^フ 之^ヲ 二^ニ一^ノ三^ノ一^ノ度^ヲ 即^チ 差^ス 〇^〇鼻^ノ一^ノ頂^ヲ 一^ノ勒^ス

鼻^ノ一^ノ上^ニ 凹^ク 處^ニ 針^ヲ 灸^ス 且^ニ 鼻^ノ 邊^ニ 毛^ヲ 一^ノ呈^シ 以^テ 二^ニ墨^ヲ 一^ノ貫^ス 一^ノ針^ヲ

貫^ス 一^ノ刺^ヲ 又^ハ 以^テ 二^ニ艾^ヲ 灸^ス 二^ニ之^ヲ 一^ノ兩^ヲ 一^ノ邊^ニ 針^ヲ 一^ノ孔^ヲ 一^ノ

喘セリ促ソク鼻ビ有ル聲シ者ニ曰フ鼻ビ頂ト勒ト目メ有テ淚ナ而シ眇ス者ニ

曰フ目メ頂ト勒ト一ニ兩リ翼ヨク垂ル下ニ者ニ曰フ翼ヨク頂ト勒ト一ニ身ニ有ル如キ二ニ

疥瘡カイサウ一ニ者ニ曰フ身ニ頂ト勒ト一ニ足ハル腫ル者ニ曰フ足ハル頂ト勒ト一ニ有ル此ニ一ニ

證シ一ニ者ニ坐ス于ニ無キ烟ケ暗ク寂シ處ニ不レ使ス驚シ動セ且ツ以テ好シ一ニ

食ツ善ク養テ亦テ以テ二ニ川ニ中ニ小ニ螺ヲ去リ皮ヲ裹フ肉ヲ飼フ之レ則チ

無シ不レ愈ト者ニ足ニ頂ト勒ト川ハ中ニ冷シ沙盛於ニ瓢子安シ一ニ一ニ才ニ

於ニ缸上一ニ以テ二ニ病ニ鷹ス坐ス於ニ冷沙上ニ過シ二ニ回五一ニ夜一若シ

不レ差イ以テ愈ト為ス度連夜坐之レ甚良○鷹ノ病ノ

皆オ畏レ人怯勞煩熱内渴而出山間溪水有

虫名曰フ二下子一也只四一五一箇肉片裹飼レ之神

效再一服亦可又黃一槩木實細一末肉片裹飼レ之之

○鷹或多放或遠路拳來身勞尿中之

黑點不塊以馬糞水和レ食飼之之

霜角鷹不二大一發之時喘息自若又貪捉レ雉之

粗知二鷹理一者不知二此一病之生一如レ常而放甚

不一可也此病者内冷外熱而出可知二此一病一一ウ

之出^{ルコト} 一也^ノ當^{カミ} 初^テ始^{コルノ} 一之時^{ハウ}放^シ 尿^シ 不^レ長^{カラ} 而^{ダシ} 斷^シ 絶^{ゼツシ}

不能^ハ 放^レ 尿^ス 一當^ニ 如^レ 此^レ 則^ク 須^ク 下^ト 捉^ル 二生^ル 一雉^ヲ 以^テ 二病^ヲ 鷹^一 多^ク

噉^ク 二熱^ク 一血^ハ 熱^ク 一肉^ヲ 飼^フ 半^ニ 食^ス 上^ニ 如^レ 此^レ 三^ニ 四^ニ 度^ニ 使^シ 鷹^ノ 内^ニ

熱^一 則^シ 可^ク 二能^ク 治^ス 一之^ヲ 須^ク 飼^フ 二熱^ク 一血^ハ 可^ク 也^ニ 若^シ 不^レ 捉^ル 二生^ル

雉^ヲ 須^ク 二雀^ヲ 鼠^ヲ 中^ニ 生^ス 一捉^ル 噉^ル 之^ヲ 熱^ク 一血^ハ 熱^ク 一肉^ハ 甚^ク 可^ク 之^ヲ

○上^ニ 木^ヲ 不^レ 下^ル 鷹^ノ 呼^ビ 引^ク 来^テ 甘^ク 食^ス 時^ニ 肉^ハ 片^ニ 二一^ニ 三^ニ

點^ト 和^セ 二入^ル 一尿^ヲ 飼^フ 之^ヲ 其^ノ 習^ヲ 永^ク 棄^ツ 矣^ニ

凡^ノ 鷹^ノ 無^ク 病^ニ 而^シ 日^ニ 漸^ク 消^セ 一瘦^ク 者^ハ 必^ズ 是^レ 針^ニ 每^ニ 也^ニ 只^ク

虫^ノ 所^ニ 侵^ス 也^ト 採^リ 取^ル 苦^ク 一參^ル 一根^ヲ 一取^テ 二水^ニ 一盆^ニ 煎^シ 至^リ 二半^ニ

盆^一 待^テ 冷^ム 鷹^ノ 子^ヲ 縛^リ 置^ク 右^ニ 水^ヲ 塗^リ 擦^ル 以^テ 二全^ク 一體^ヲ 盡^ク 一濕^ク 一 二一^ニ 二才^ニ

爲^ス 限^ト 坐^ス 架^ニ 待^テ 乾^ク 須^ク 下^テ 於^テ 二坐^ニ 一架^ノ 下^ニ 鋪^ク 油^ヲ 一席^ニ 一驗^ス 中^ニ 一 看^ル

右^ノ 一虫^ヲ 死^ス 一否^ク 上^ニ ○鷹^ノ 翅^ヲ 虫^ノ 損^ス 苦^ク 一參^ル 一根^ヲ 煎^シ 水^ヲ 翅^ニ 一

根^ノ 當^ニ 損^ス 一處^ニ 一塗^リ 擦^ル 使^シ 之^ヲ 漬^ク 一濕^ク 一則^ニ 計^ル 日^ニ 而^シ 差^ス 生^ス

レ羽^ノ 如^シ 常^ニ

凡^ノ 鷹^ノ 或^ハ 累^ル 一 日^ハ 或^ハ 六^ニ 一 七^ニ 一 日^ハ 專^ク 不^レ 食^ス 若^シ 勸^レ 食^ス 則^シ

退^ル 走^ル 不^レ 顧^ル 者^ハ 是^レ 必^ズ 身^ヲ 一 勞^ム 煩^ム 一 渴^ム 所^ニ 致^ス 生^ス 病^ニ 也^ニ

鷹見^レ水飲^ス先^ツ勸^ム葉^一枝茶^一水^一繼^ム勸^ム二月^一經^キ

水^ヲ鷹若^ク嗜^ム食^ヲ則^レ不^レ拘^ル時雖^レ嗜^ム飲^ム水^一忌^ム食^ヲ如^ク

前^レ須^ク下^ヘ捉^ム生^{ケル}雀^ヲ飼^フ之^ヲ雖^レ不^レ貪^ム食^ヲ一^ニ點^一啄^ク食^フ

則^レ生^{ケル}雀^ハ連^テ續^シ生^キ一^ニ捉^ム係^テ坐^ス一^ニ架^ス上^ニ鷹^ハ有^ル食^心一^ニ則^ク一^ニ二^ウ

自然^ニ而^シ食^フ其^ノ病^即差^チ

凡^ソ鷹^ニ滿^リ身^ニ疥^瘡一^者身^一頂^一勒^之也^ハ哺^乳小^一兒^黃

糞^和水^攪之^細一^布篩^之以^ニ竹^一筒^一納^于鷹^ノ口

中^一以^ニ食^倍充^滿一^為限^一灌^下一^ニ度^一即^差

凡^ソ鷹^多放^雖無^ニ病^一證^一放^鷹者^意謂^多一^放以^テ

病^為嫌^レ則^肉一^斤二^一三^一點^和二^月一^經一^水一^飼之^則

病^不生^雖不^ニ多^一放^鷹是^熱一^物用^心內^渴須^ニ

初^一夜^一二^一更^中勸^水以^ニ鷹^不飲^為限^而止^セ

凡^ソ鷹^一鶴^尿有^ニ長^一虫^一榧^一子^細一^末肉^裹飼^之然^モ

差^有毒^狼一^牙草^煎水^和食^飼之^肉一^片二^一三^一一^三才^之

點^裏清^蜜飼^之則^長一^虫盡^死此^一葉^尤妙^之

凡^ソ鷹^遠一^路拳^來身^一勞^煩一^熱似^無二^病證^一粗^知二^之

鷹^{トビ}一^ニ理^ル者^ヲ以^テ爲^ス無^シ病^ヲ放^ス一^ニ使^ハ則^チ病^ム一^ニ死^ス丁^ニ一^ニ寧^ム慎^ム勿^シ二^ニ放^ス一^ニ使^ハ須^ク二^ニ坐^ス一^ニ養^フ休^ム氣^ヲ十^ニ餘^ニ日^ヲ後^ニ更^ニ調^フ放^ス一^ニ使^ハ爲^ス妙^シト

八^ノ九^ノ十^ノ月^ノ間^ニ鷓^ノ子^ノ體^ノ大^ニ如^ク鷹^ノ者^ノ勿^シ論^フ甫^ク一^ニ羅^フ

山^ニ一^ニ陳^レ羅^シ一^ニ取^ル勿^シ二^ニ急^ニ速^ニ拳^ヲ一^ニ持^ツ一^ニ須^ク下^リ於^テ二^ニ寒^ニ一^ニ煖^ニ適^ク一^ニ中^ニ處^ス

坐^ス一^ニ養^フ往^ク一^ニ々^ニ拳^ヲ一^ニ持^ツ上^リ方^ニ二^ニ夏^ノ節^ニ一^ニ毛^ヲ一^ニ羽^ヲ落^ル一^ニ時^ニ遲^ク一^ニ緩^ク不^シ

落^ル須^ク下^リ鶴^ノ雛^ヲ捉^ム下^リ一^ニ二^ニ日^ヲ飼^フ之^ヲ則^チ毛^ヲ一^ニ羽^ヲ一^ニ時^ニ

盡^ク落^ル鷹^ノ羽^ヲ不^レ落^ル亦^ク食^フ爲^シ妙^シ且^チ鷓^ノ與^リレ^ル鷓^ノ皆^ク熱^ク一^ニ物^ニ而^シ一^ニ三^ニウ

時^ニ一^ニ又^ク極^ク一^ニ熱^ク鷓^ノ一^ニ子^ヲ浴^スレ^ル水^一一^ニ日^ノ内^ニ須^ク二^ニ四^ニ一^ニ五^ニ度^ニ一^ニ冷^ム

水^ヲ改^メ給^フ羽^ヲ一^ニ衣^ヲ雖^レ未^ダレ^ル稱^ム節^ヲ趁^ル二^ニ孟^ノ秋^ノ一^ニ須^クレ^ル拳^ヲレ^ル之^ヲ漸^ク

々^ニ盡^ク一^ニ夜^ヲ不^レ離^ル手^ヲ調^フ一^ニ習^フ不^レ厭^ムレ^ル人^ノ則^チ初^ニ引^ク一^ニ食^フ自^ラ

レ^ル近^ク而^シ呼^ブ日^ヲ一^ニ漸^ク遠^ク一^ニ引^ク々^ニ食^フ則^チ以^テ二^ニ初^ニ一^ニ肢^ヲ兒^ノ一^ニ鷓^ノ雌^ヲ

雄^ノ一^ニ相^ヲ一^ニ間^ヲ爲^シ食^フ飛^ビ一^ニ引^ク飼^フ而^シ教^ムレ^ル之^ヲ熱^ク一^ニ調^フ後^ニ朝^ニ暮^ニ

乘^リ二^ニ涼^ニ一^ニ氣^ヲ一^ニ拳^ヲ一^ニ持^ツ歸^ル早^ク一^ニ粟^ノ田^ニ一^ニ頭^ヲ尋^ク二^ニ覓^ク一^ニ兒^ノ一^ニ雉^ヲ放^スレ^ル之^ヲ

得^ルレ^ル捉^ム則^チ勿^シ二^ニ急^ニ速^ニ直^ニ一^ニ進^ム一^ニ作^ル聲^ヲ呼^ブレ^ル之^ヲ須^ク下^リ待^ツ二^ニ甘^ニ一^ニ食^フ

而^シ進^ム上^リ飼^フ二^ニ半^ニ一^ニ食^フ一^ニ餘^ヲ許^ス一^ニ後^ニ浮^ク二^ニ取^ル一^ニ兒^ノ一^ニ雉^ヲ一^ニ慣^ル熱^ク々^ニ捉^ム

則雖^レ冬^一節春^一時^ト雌^一雉^レ皆可^レ捉^ル也^ト鶴^一子^レ放^一使^フ
 之^レ時^ノ須^ク使^レ下^一糧^ト■^ト盈^一不^レ爾^レ則^レ生^レ病^ト且^ク熟^一調^一一四^オ
 放^一使^フ則^レ只^レ於^テ朝^一夕^一拳^一持^一放^一使^フ不^レ妨^{ナラ}然^{トモ}性^一惡^{アラキ}
 則^レ不^レ拘^ニ此^ノ法^ニ一鶴^一子^レ初^レ捉^ル則^レ畏^レ人^ヲ怯^一勞^一内^一熱^ス
 煩^一渴^一之心^ノ未^ダ殄^一加^一之以^テ寒^一凍^一下^一肌^一拳^一持^一急^一
 速^レ調^放則^レ必^ス死^ス丁^一寧^一粗^一知^ニ鷹^一理^一者^一不^レ知^ニ調^一
 養^一之法^一反^一謂^フ易^レ斃^一惑^一之^レ甚^キ矣^ト當^レ如^ク上^ノ法^一調^一
 養^一教^一放^一則^レ多^ク壽^ト不^レ病^一矣^ト凡^ソ用^レ棗^一放^一教^一諸^一法^一
 與^ト鷹^一同^一籠^一奪^一與^ト鶴^一同^一

鷹賦

惟^レ茲^一禽^一之^レ化^一育^一実^一鍾^一山^一之^レ所^一生^{スル}資^ニ金^一方^一之^レ
 猛^一氣^一檀^一火^一德^一之^レ炎^一精^一何^一虞^一者^一之^レ多^一端^一運^一横^一一四^ウ
 羅^一以^テ羈^一束^一綴^一經^一絲^一於^レ雙^一臉^一結^一長^一繩^一於^レ兩^一足^一
 飛^{トモ}不^レ遂^ニ於^レ本^一情^一食^一不^レ充^ニ於^レ所^一欲^一逸^一輸^一由^一而^レ
 暫^ク斂^一雄^一心^一為^レ之^レ自^一局^一若^ク乃^ク貌^一非^レ不^レ相^一乃^一
 多^一途^一指^一重^一字^一尾^一貴^一合^一盧^一立^一如^ク植^一木^一望^一似^一

愁ウレシ胡コ鬚ソウ同トウ鈎コウ利リ脚キョウ等トウ荊シヨウ枯コ亦モト有ル白ハク如ニ散サン花カ

赤セキ如ニ點テン血ケツ大ダイ文モン若ニ錦キン細サイ斑ハン似ニ纈セツ眼ガン類レイ明メイ珠シュ

毛モウ猶ニ霜ソウ雪セツ身シン重ジュウ若ニ金キン爪ソウ剛コウ如ニ鐵テツ或ニ復フク頂テイ平ヘイ

似ニ削セツ頭トウ圓エン如ニ卵ラン臆オク濶クワ頸ケイ長チヤウ筋キン脛ケイ短タン翅テイ厚コウ

羽ウ勁キョウ啤ヒ寬クワン肉ニク緩クワン此コノ才サイ用ユウ俱ク爲ニ絶ゼツ伴バン或ニ

鶉チウ頭トウ或ニ似ニ鶉チウ首シュ赤セキ晴チヤウ黃ワウ足ソク細サイ骨コツ小コウ肘チウ懶ラン而ニ一イツ五ウ才サイ

易イ驚キヤウ奸ケン而ニ難ナン誘ユウ住ジュ不フ可カ呼コ飛ヘイ不フ及キヤク走ソウ若ニ斯シ

之ノ輩バイ不フ如ニ勿フ有ユウ若ニ夫フ疾シツ食シツ速ソク消シヨウ此コノ則ソレ有ル命メイ

駕カ頸ケイ猴コウ立テイ是シ爲ニ無ム病ビョウ廁ソウ門モン忌キ大ダイ結ケツ肛コウ惡オク軟カン

條チョウ不フ欲ヨク絶ゼツ背ハイ不フ宣セン喘セン生シユ於ニ窟クツ一イツ者シヤ則ソレ好コウ眠メン生シユ

於ニ木キ一イツ者シヤ則ソレ常ジョウ立テイ雙ソウ較カウ長チヤウ者シヤ則ソレ起キ遲チ六ロク翻カン短タン

者シヤ則ソレ飛ヘイ急キツ毛モウ衣イ屢リン改カイ厥ケツ色シキ無ム常ジョウ寅イン生シユ酉ユ就ジュ

捺ナツ號ゴウ爲ニ黃ワウ二ニ周シュウ作サツ鵠コク千セン日ジツ成テイ蒼ソウ雖レト曰ト排ハイ廬ロ

性シヤウ殊シユ衆ジュウ鳥ニ雌セイ則ソレ體テイ大ダイ雄ジョウ則ソレ體テイ小コウ遇ユ犬ケン則ソレ驚キヤウ

猜サイ見ケン人ニン則ソレ馴ジュン擾ヤウ養ヤウ雖レト則ソレ小コウ病ビョウ野ヤ羅ラ則ソレ多タ巧キョウ

察サツ之ノ爲ニ易イ調テウ之ノ實ジツ難ナン格カク必キヤク高コウ迥キョウ室シツ必キヤク華カ寬ケン一イツ五ウ

薑^ハ以^テ取^リ熱^ヲ酒^ヲ以^テ排^ハ寒^ヲ 須^ニ温^ニ暖^ニ肉^ハ不^レ陳^一 乾^ニ
 近^レ之^ヲ令^テ狎^シ靜^シ之^ヲ使^テ安^シ晝^ハ不^レ離^一手^ヲ夜^ハ便^ニ火^一宿^ス
 微^シ加^シ其^ノ毛^ヲ一^ヲ小^シ減^ス其^ノ肉^ヲ一^ヲ肌^ヲ肥^シ腸^ヲ一^ヲ瘦^シ心^ヲ一^ヲ和^シ性^ヲ一^ヲ靈^ニ
 念^ヒ絶^シ雲^ヲ一^ヲ霄^ヲ一^ヲ志^ヲ在^リ二^ニ馳^一一^ヲ逐^ニ
一^ニ散^一者^ノ輕^也格^也一^ニ者^ノ今^ノ之^ノ雨^也濯^也也^格者^ノ架^也也^格也^格

真^ニ之^ノ求^也便^也

右古本鷹鶴方雖多不審依无類本

不能校合只任本書訖 通堯 一六才

彰考館御本奥書

右^一者^ハ以^テ三^ノ山^一一^ヲ本^ヲ藤^一一^ヲ右^一一^ヲ衛^一一^ヲ門^一所^ノ持^リ本^ニ一^ヲ令^テ書^ニ寫^ス
 校^一一^ヲ合^一一^ヲ畢^ス 養^應三^甲年^六月^六日

古本鷹鶴方以ニ水戸彰考館御本書寫

之^ヲ一^ヲ天^保四^年五^月廿^六日

史館待命 平小山田 與清 一六ウ

右此一帖者以三平與清小山田將曹自筆

本一於東武邸舍手自下翰書ニ一寫之一畢

天一保四年歲次癸巳仲秋下澣日

正木治部越智宿禰通亮

(花押)「一七オ

右古本鷹鶴方者以正木通亮手書本騰

寫畢天保四癸巳之秋九月廿八日起筆

十月五日終卷馴鷹繫務之間連夜務下

採毫成功畢通亮者近江彦根之家士也

善國学側耽探鷹書頃日奉主命來江戶

館而勤仕余有邂逅者而交情密也固得

借此書寫焉

雜司谷鷹人 片山勇八賢 (花押)「一七ウ

(1) 注

正統ハ明、英宗ノ
年号之十四年ツ、

ク日本永享九年

ヨリ嘉吉文安宝徳

ノ間ニアタル凡四百年

ハカリニナル

(2)

○草州湯柵州二字皆謬也

當_レ作_レ州草州則未_レ詳_ニ何

物_一自_レ前以_ニ黄栢實_一搏

碎作_レ湯称_ニ草州湯_一治_ス

鷹虱_一黄_一栢即今郷_一

菜用_レ皮黄_一栢_一木也

(3)

○梨萋根即枯萋根

到處有_レ之我國郷菜

也栢部根_一栢_一當_レ作_レ百

乃唐材也

(4)

○狼牙草。俗_ニ草鞋

菜_一到處有_レ之

(5)

一本簪作_レ反

(6)

一本身作鼻

(7)

一本百作等

(8)

胡黄之間_ニ麻_一字

脱_ス敷

- (9) 疑、凝、誤カ亦
下、内當作肉
- (10) 省、肖、誤乎
- (11) 一本際作熱
- (12) 食、二、間、若、飼文字
脱スル歟
- (13) 一本力、字、二字トモ
作筋
- (14) 一本項作頂
- (15) 想、相、誤歟
- (16) 屎、屎、誤歟
- (17) 一本頂作項
- (18) 皆頂ノ間ニ足ノ字
ヲ脱スルナルヘシ
- (19) 一本下、作、レ、可、誤也
- (20) 一本丁作下
- (21) 而時之間ニ若シ
- (22) 夏ノ字ナト脱セ
シニハアラヌカ
- (23) 一本末作末
初引ノ間ニ呼、字
脱スルカ可考
- (24) 一本丁作下誤、

〔付記〕

本稿は、科学研究費補助金(基盤研究C、課題番号24500247、研究課題名「放鷹文化と鷹書類の研究」、研究代表者 中本大)、生き物文化誌学会助成制度「さくら基金」による研究成果の一部である。

〈キーワード〉鷹狩り、韓国の鷹書、鷹鵠方

The Whole Sentence of the Text of Falconry Called “Yo-kotsu-ho” which National Library of Korea Owns

Yasuko NIHONMATSU

The whole sentence introduces a text of the falconry called “Yo-kotsu-ho” which National Library of Korea owns. This text was established in Korea in the 15th century. An author is 안평대군(安平大君)이용(李瑬). The point that is particularly important about this text is a sentence to see so that a written statement of expert opinion comes. I understand what kind of people read this text by this sentence in Japan. Furthermore, I can guess how falconry culture in Japan unfolded from the information. Therefore I think that the important clue that Japan and interchange of the Korean falconry culture become clear is provided when I introduce the whole sentence of this text.